

## Watsonism に於ける「意識」の位置について

田中 俊也

関西大学

## I. はじめに

ここで述べようとするのは、心理学史に於ける Watsonism の位置づけでもなければ、所謂行動主義の哲学的諸原理でもない。

心理学研究に際しての、研究対象の発言や行動の「意味の了解」を基調とする「人間的」方法と、行動の「客観的観察」を基調とする「科学的」方法との間の深い溝、不毛な対立や、それが如実に現われたところの、教育心理学のテキストに於ける「総論」と「各論」との妥協的共存状態を、少くとも両者の共通基盤を明らかにすることでそれらの相互不信を取り除かねばならぬ、という考えに基づいて行なわれた考察である。

その際、「科学的」立場の尖鋭化の可能性を争んだ Watsonism の内、特に「意識」をどう扱っているか、という事が、こうした対立と揚の體を持っていてと思われるが、先づそうした対立の存在を確認しておきたい。

## II. 「人間的」と「科学的」

「人間的」側は、第一原理として人間を、世界に投げ込まれているながらもそれを意味づけ変革する活動の主体でありたいと願う意志的存在として規定する。

この立場から観れば「科学的」方法は、具体的存在場面に認識のフィルターをかけ、それを通して見えるもののみを「正確な知識」として存在を説明しようとしている、と批判できる。しかもそのフィルターが物理学的還元主義によって造られたものであれば、まさしく人間的な諸側面——活動の意味や価値の問題——を見落としてしまい、生活場面の正しい説明原理とはなり得ない。「科学的」説明は永遠のアナロギ—であって、決して現実そのものに迫り得ない、とする。

一方「科学的」側は、世界の諸存在は合理的諸関係の内に存在しており、人間は「学」の主体でこそあれ、決してそうした合理性の鎖の外に在るものではない、という事から出発する。

ここから観れば、「人間的」と言う時、何が人間的であり何が人間的でないのかという、その判断基準が非常に曖昧である、という批判が浴びせら

れる。更に続けて、「知識」はそうした曖昧な「人間」を通して獲得されるが、それが公共性を持ちかつ具体的な人間にとって有効であるためには、表象作用を経て感覚条件をある型の中にはめ込む作業、即ち言語化しなければならぬ。もしそこで個人的な感覚条件を言語化・数量化しなければ決して「学」は成立し得ず、科学的方法とはこの様に客観化された条件を採集することである。それによってこそ知識の体系化への道が開け、こうした正しい知識こそが人を説得し得るのだ、これが「科学的」側の主張である。

この両者を尖鋭化していけばいく程その溝は深くなり、最終的に結びつくところは、公的かつ私的な人間究明の学としての「心理学」の不在である。即ち「心」学あるいは「理」学としてのみ可能となる。

## III. 意識——意味——行動

心理学に於ける上述の対立が深刻でありかつ陰湿であるのは、その研究対象が、日常的な場面では何等の脅を張った「学」も必要とされない「人間」そのものであることと、われわれの時代の「知」の状況——従来の価値観への疑問の投げかけ——に由来する。

ここでは前者のみに言及するが、人間を科学的に捉え様とする時、そこでは研究者の側の態度と、被研究者の何を研究するかという研究対象と、被研究者の「体験」とが必ず考慮されねばならない。その際準備を複雑にしているのは、物理学等自然科学に於いては考慮の余地のない事象である、被研究者側の「体験」である。

諸体験は多様な「意味」を孕んだ現象であり、かつ体験は「意識」されるが故に、意識は意味を中心に組織されていると考えられる。(その方法的な前提に誤りが在ったとはいえ、Wundt を中心とする意識主義の心理学に於いては、この、被研究者の側の体験が出发点になっていた。即ち、意識の直接対象を心理学研究の第一対象と同一視していた、と考えられる。)しかし、意識は意味を前提するとしても、意味連関(Sinnzusammenhang)は必ずしも論理的に結合されてない故に、事象を

論理で処理していくという「科学」の対象にはなり得ないものであった。

Watson (1913) の「心理学が意識に関する全ての言及を廃棄せねばならない時が来た株である」という主張には、こうした「科学化」への焦りが読み取れる。そこで Watson (1919) は、日常的な意味に於ける人間的諸現象たる意識 (consciousness)、感覚 (sensation)、知覚 (perception)、注意 (attention)、意志 (will) 心像 (image) 等の曖昧な概念を使用することを極端に拒み、それらを観察言語で再定義することによって心理学を体系化した。

この事實は通常、Watson は被研究者側の「体験」を無視することによって——即ち「意識」の存在を否定することによって——研究対象を観察可能な「行動」に限定し、その結果、人間不在の真空な心理学が出来あがってしまった、と解釈されている。

#### IV. 「意識」の位置

この、Watsonism に於ける「意識」の否定は、しがないが、通常考えられている様な「人間」の否定では必ずしもない、と考えられる。それは、今日のわれわれの眼からすれば明らかと誤解に満ちた、時代の科学観の象徴たる業であった。

Watson (1921) が「活動が彼の意味なのである」とし、実際に観察され得る活動から切り離して意味の問題をとりあげることは不毛な努力である、と述べる時、そこには、当時の「科学」の綱では引掛からない、意識の次の様な性格が考慮されていた。

第一にそれは、純粋に個人的体験であり（意識の私秘性）、第二に条件反射の例からでも、意識と行動とは必ずしも並行関係にはないということ（心身の非並行）、第三に、意識は行動の尺度たり得るだけの質的恒常性を持たない、という点であり（意識の非恒常性）、第四に、意識の内省的な分析が、近代科学の一つの目標であった諸現象の予測と制御という、人間中心主義的動機を満足させないという事（意識研究による行動予測の不可能性）であった。

第二の事柄は内観心理学の基本テーゼへの反証であるとしても、こうした「意識」の性格は「科学」の対象とならないものであり、観察を基調とし人類の進歩を目的とするという実証科学の一分材たるには、「行動」に視点を換えざるを得な

ったと考えられる。そこには「意識」の否定が「体験=意味」の否定に短絡する必然性は存在しない。

#### V. 研究者の態度

Watsonism に於ける「意識」の否定とは、世界内存在者たる人間の「意味への意志」の存在の否定ではなく、唯それを、具体的に観察可能な人間のふるまいに代置し、ここで改めて観察者・研究者の側に、反応の意味や活動の意味を読み取る事を要請した、という事である。従って S-R の「尋索」の集積とは、Lashley (1923) の言うところの方法論的行動主義という単なる手段的行為なのである。Watson (1917) が「刺激要因の統計が状況として、人間を全体として反応させる。状況は最も単純なものであったり、最大限に複雑なものであったりし得る。」と言う時、それは、人間は（環境）世界との関りに於いて生かす、という事を意味しているのであって、そうした人間を統制したり捏造したりするのは独り研究者の手に任せられている事を示している。

ここに於いて、「科学」の中立性・進歩史観を信じて行動のデータ採集にのみ専念するか、当初から観察や実験の意味を現実の意味場に引きつけて採用するかは、研究態度の基本に関ってくる。

被研究者の「体験」が研究者の側に移入されねばならない、というこの Watsonism の基本的構造の認識を普遍化していくところに、「人間的」と「科学的」の不毛な対立を止揚する径が在る、と考えらる。

#### References (Watsonism)

Watson, J. B.

1913 : Psychol. Rev., 20, 158-177

1914 : Press. (Behavior: an - )

1916 : Psychol. Rev., 23, 89-116

1917 : Psychol. Rev., 24, 329-352

1919 : Press. (Psychology from -)

1921 : Brit. J. Psychol., 2, 87-104

1924 : Psychol. Rev., 31, 273-280

1928 : Press. (The ways of -)

1930 : Press. (Behaviorism)

1. 意識・意味・行動の諸連関について。
2. 行動の「構造」と「意味」について。
3. 心理学に於ける「現実」とは何か。

以上を御対講願いたい。